

新共謀罪を廃案へ!

全学連(斎藤郁真委員長) 書記局通信

2017年6月3日
No.471

Tel 03-3651-4861

mail_cn001@zengakuren.jp

http://www.zengakuren.jp/

「共謀罪の参院採決阻止!」



国鉄1047名解雇撤回! 戦争・民営化と闘おう

国鉄闘争全国運動 6・11全国集会

◆6月11日(日)13時~

◆江戸川区総合文化センター大ホール

(東京都江戸川区中央4-14-1)

【主催】国鉄分割・民営化に反対し、1047名解雇撤回闘争を
支援する全国運動(国鉄闘争全国運動)

※写真は1600人が結集した昨年の国鉄大集会(江戸川区総合文化センター)



沖大自治会選挙を支援した京大生の感想！

先日、沖大の選挙応援に沖縄に行ってきたのでその報告をします。5月17日の夜に沖縄に行き、18日から始まる沖大自治会選挙の初日を手伝いました。沖大自治会は毎年選挙や集会への職員・教員による弾圧が激しいらしく、今年はどんな攻防になるのかまったく予測もつかないまま、ドキドキの選挙初日でした。私が選挙で驚いたことは大きく3つあります。1つ目は赤嶺さんへの信頼の大きさ。2つ目は学生の貧困への関心の高さ。3つ目は当局による妨害の少なさです。

沖大生の赤嶺さんへの信頼の大きさにはびっくりしました。最初に討論に入ったクラスでは、真剣に赤嶺さんの話を聞いて最後に拍手をしてくれた学生がいました。信任理由は日頃から頑張っているから、という学生もいました。昼休みに中庭で投票を呼びかけると、赤嶺さんが直接投票をお願いするのとそれ以外の人がお願いするのでは学生の反応がまったく違いました。あるいはキャンパスの外で沖大生とすれ違って、赤嶺さんにあいさつをしてくれる学生もいました。沖大ってあったかいなと思って感動しました。

沖大自治会再建当初に教員やゼミ生を使って「帰れ」コールがあった話や、たとえ一人でも突き抜けて立ち上がった後、その後周りの学生とどう信頼関係を作るかが難しいと思っている話を赤嶺さんから聞いていたので、その後数年間で分断を乗り越えて赤嶺さんが築いた信頼の大きさにびっくりしました。日頃ビラを配ったり演説をし続ける姿勢を学生は見ているのだということと、学生の厳しい現実はどう寄り添い、それに対して自治会や学生運動をしている人たちがどんな未来を提示できるのか、声をあげることにすら難しい沖縄の現実の中で苦しんできた赤嶺さんの苦闘の成果だと思いました。

2つ目の学生の貧困への関心の高さは、沖縄の厳しい現実をそのまま反映したものなのだと思います。大学に入ったら休み時間には講義やゼミの話で学生が討論しているのだと思っていたら、学生の貧困の中で、少しでもすき間時間が空いたらバイトをしようという発想に頭が自然となってしまうのだというのが現実だったという沖大生の言葉は、とても重いものがありました。日本社会がどこまで大変なことになっているのか、その現実をあらためて突きつけられた気がしました。

でも暗い話ばかりではありませんでした。私は沖大の選挙応援中に、一人の職員も見ませんでした。沖大で今回まったく弾圧がなかったということは、それだけ運動の支持者が増えているということだと思います。学生や職員、あるいは卒業生や他の沖縄県民、誰のどんな声が作用しているのかわかりませんが、明確に弾圧できない状況にあるのだと思います。

その日の夜には、辺野古の新基地建設反対の運動をしてきて、今は労働運動をしている富田晋さんの話を聞きました。辺野古での基地反対運動の総括から、運動にかかわるように

なった経緯、おばあの話や、今の職場で飴ちゃんを配ってみんなと仲良くなった話や運動論、全軍労牧港支部青年部の話など、話は多岐に及びました。

私は沖縄には以前も何度か足を運んだことがあって、その度に沖縄に基地があるとはどういうことかを考え続けてきました。基地についてよくニュースになるのは米兵による暴力と環境破壊の問題です。もちろんどちらも許しがたいものですが、基地があるということはより広範に様々な問題を引き起こしているのだと思います。日本が戦争をすれば基地のある沖縄は真っ先に狙われるでしょう。沖縄戦の時のように、また捨て石にされるでしょう。と同時に、沖縄から飛び立った米軍の飛行機が世界中で人殺しをしてきたということも事実です。それは沖縄が加害者でもあるということです。あるいは、沖縄にはまともな鉄道がなく、道路もしょっちゅう渋滞しています。平地の大部分を基地にとられているので、道路や鉄道を敷く十分な土地がないからです。アメリカの統治下では、基幹産業を育てることは許されず、今では振興策という名のもと、コールセンターなどが誘致されて「非正規の島」になっています。あるいは基地周辺に住んでいる子供たちは、騒音で人の話が聞こえないことが頻繁になりすぎて、しょっちゅう、え？って人の話を聞き返すそうです。基地があるということ、それは生活・労働・交通・産業・身体…そのすべてに渡って抑圧され続けるということなのだと思います。そしてそのことに「ヤマト」の人間がどう向き合えばいいのか…。数回沖縄に来てそんなことを考えていた私にとっては、富田さんの話はすごく面白かったです。基地があることで生活のすべてが脅かされるのなら、生活のすべてに責任をとれる反対運動を作らなければなりません。だからこそ労働運動が大切なのだと思います。基地反対運動は本来、「辺野古」だけとか「沖縄」だけの利益を守るものではなく、すべてを獲得する可能性を秘めているのだと実感しました。基地に反対する運動は命を守る運動なのだという真髄は、その辺りにあるのではないかと思いました。だからこそ、「ヤマト」の運動はこれと連帯することができるのだと思います。むしろ、沖縄であがっている声に応えなければならないのだと思います。それ以外に「ヤマト」の責任の取り方はないのだと思いました。

富田さんが今の職場でどうやって信頼を勝ち得ていったかも聞きました。赤嶺さんの話と通じるところもあり、2つの経験を通して、情勢が大変な時にこそ、信頼関係に基づいた大衆運動が大切だと思いました。情勢が大変な時には、主体的であること、社会の変革者足りうるのだということを実感することは難しいことだと思います。だからこそ、多くの人の人生に寄り添い、多くの人から信頼を得て、一人一人が開放的にともに共同性を取り戻していけるような運動が必要とされ、そのような運動が最後には勝つのだと思います。

